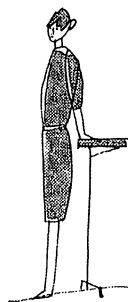


真諦と俗諦

平 川

彰



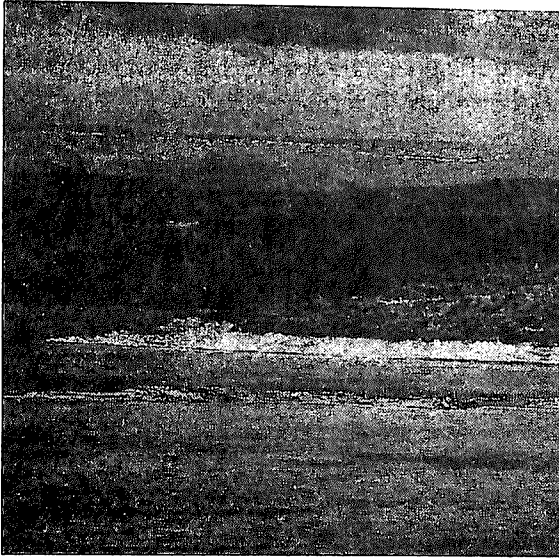
佛教を正しく理解するには、二諦を正しく知る必要があります。二諦とは「二つの真理」という意味ですが、これは真諦と俗諦のことです。詳しく言えば、第一義諦と世俗諦ともいいます。

龍樹は『中論』の中で、この二諦につきまして、「若し人、二諦を分別することを知る能わざれば、すなわち深佛法において、真実義を知らず」と言っています。「二諦を分別する」とは、真諦と俗諦とを

正しく使い分けることです。つまり真諦と俗諦とを平等に取り扱うことはできないのでして、価値に上下があります。それ故、二諦は手心を加えて、正しく取り扱わねばなりません。その取り扱い方を誤ると、世間の人情の世界をこわしてしまったり、或いは佛法の真実を失ってしまうこととなります。そのために、二諦を分別することを知らないと、深佛法において真実義を得ることができないと言うのです。

深佛法とは、佛陀の教えの深い意味ということですが、つまり佛教の理解については、佛教の教理の意味を正確に理解したというだけでは足りないのです。その理解を、時と場合に適合するように、正しく活用しなければならぬという意味です。

それならば二諦にはどういう意味があるかとい



龍樹終焉の地とされる南インドのナーガルジュナコンダ

ますと、まず「世俗諦」とは、「世間が真理として認めていること」という意味です。世俗諦は、世間では真理として通用していますが、しかし世間の人には煩惱に色づけられていまして、迷妄の世界に生きていますから、そこで正しいと認められていても、佛教の立場から見たら真理と言えないことがあります。しかし真理でないからと言って、それを全く否定してしまつたら、佛教の聖者も世間で生きていくことは出来なくなるでしょう。

これにたいして「第一義諦」は、「佛教の聖者が真理として認めること」という意味です。佛教の悟りの智慧によって認められる真理が第一義諦です。これは佛教では真理として立てますが、煩惱に汚れた世間の智慧では真理として認め難いものです。

このように世俗諦は、世間では諦（真理）であるが、佛教では諦とはならないこと、第一義諦は佛教では諦として立てるが、世間では諦として認めないことを言うのです。このように両者は相互に対立す

る性格がありますから、佛教者は二諦を正しく使いわけることが大切であるというのです。

例えばこの二諦の問題を「無我」について考えて見たいと思います。言うまでもなく「無我」は佛教の根本教理の一つです。諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜を三法印といひまして、佛教と佛教以外の思想とを区別する基本教理であります。「諸法無我」とは、あらゆる存在は、無我であり、実体がないという意味です。私共は、自分に「自我」があると思つています。しかし私共の身体も心も絶えず変化していますから、私共の心身の中に、変化しない、自己同一の自我があるとは言えないわけです。自我意識はありますが、それが自我があることを証明するものではありません。したがって理屈の上からは、何ぴとも無我であることを認めるであらうと思ひます。しかし私共には、自我にたいする執着がありますので、理論的には無我であることを承認しつつ、本能的に自我を認めてしまうのです。しかし佛教の聖者

は、「無我觀」を實踐しまして、自我の執着を滅し、無我の境地を實現しています。

しかし佛教の聖者でも、まったく自我を認めないわけではありません。認識主觀としての自我は認めています。ただしそれは絶えず変化しているのです、変化しながらつながっている自我意識でして、これを仮我といひます。このように第一義諦の立場でも仮我は認めています。しかし世俗の世界では、この仮我をも実我と見ているのです。

しかし人格の中心を自己同一の自我であると考えないと、世俗の世界では困ることがあります。例えば去年お金を貸して今年返してもらうには、借りた人も貸した人も、自己同一の間である認めないと不可能なわけです。或いはまた学校に入学する人も、卒業する時、同一人物でないと、卒業証書ももらうことはできないでしょう。世間の常識では人は生れた時から死ぬまで同一人物であると思われています。

したがって佛教の聖者は、世間とまじわるときには、心の中では自己も世界もすべて無我であると認めつつも、世俗に歩調をあわせて、相手の理解にしたがって、自己を自己同一の自我であるとして取り扱うわけです。そうでないと約束をしたり、もの貸し借りもできないことになります。

「和光同塵」という言葉は老子の言葉ですが、天台大師もよくこの言葉をつかっています。これは智慧の光りをやわらげて、俗塵に同ずる意味でして、真谛のするどい智慧を心の奥深く蔵しつつも、世俗に入れば俗諦に同ずるのです。しかしもちろん無制限に世俗に譲歩するのではないのでして、世俗にたいしては絶えず迷妄の世界から脱するようにはたらきかける必要があります。世間が楽であると思っていことは真の楽ではなく、苦の原因になることを示し、執著を捨ててこそ真の楽があることを示すのです。ここに真俗二諦の中道の立場があると思います。もう一つ世俗諦について注意すべきことは、世俗

諦は言説諦とも言いまして、言葉によって表現された真理という意味です。しかし言葉によつては、ものの真相を完全に表現することはできません。この点を中論には「佛は諸法実相を説きたもうも、実相中には語言の道なし」と述べています。諸法実相とは、ものの真実のすがたという意味です。この真実の世界では言葉は絶えてしまうというのです。

みなさまの健康と地域医療に貢献する

医薬・医療品総合会社



会社

三生堂

取締役社長 山田 隆 史

○本社/神戸市中央区山本通2丁目14番1号 tel.078-231-4341(代表) ○兵庫○大阪○京都○奈良○和歌山○滋賀○福井

これには、悟りのぎりぎりの世界は言葉で表現できない、言亡慮絶であるという意味もありますが、同時に日常の経験の世界でも、ものの真相は言葉では表現できないという意味であります。例えば「私の書齋に大きな机がある」と言いますが、それを聞いた人にはどんな机であるか見当が付きません。しかし、それをさらに説明して、大いさは畳一畳ほどあり、灰色のスチール製であるといえ、かなり輪郭は明らかになりますが、しかし実物を目の前に思い浮かべることはできません。その机をどんなに詳しく説明したとしても、言葉で実物を示すことはできないでしょう。

その理由は、机という言葉・概念は一つですが、事実の世界に机は無数にあるからです。ですから教室で先生が、教師用の大きな机を指して、「これは机である」と言えば、生徒のすわっている小さな机は、どうして机であるだろうかと疑問がおこります。しかも生徒の机の中にも、新品のピカピカのものも

あれば、古くて傷だらけの、足の曲ったものもあります。そういう千差万別の机を、同じく「机である」ということは容易なようで、むつかしいのです。ホテルで研究会などをやれば、机の上に書類をひろげて、研究をしますが、おひるになって、ボーイさんがやってきて、その机に白い布をかけて、その上にナイフやフォークを並べたら、それは食卓であるわけです。すなわち本をひろげて勉強をすれば机ですが、食器を並べて食事をすれば食卓であります。作用・はたらきによって「存在」が変わるのです。そこには、机という実体があるのではないのです。

他の人はピカピカの新しい机に坐っているのに、自分だけ汚ない机を宛てがわれたら、「これは机ではない」と思いかも知れません。金剛般若経に、「如来は、諸の心は心でない」と説く。それだから心という。何故なれば、過去の心は不可得であり、現在の心も不可得であり、未来の心も不可得であるからである」と説いています。この言葉を机に当ては

めれば、「この机は机ではない。それだから、机という。何故なれば机の実体は不可得だからである」とでも言えるでしょう。机には机という実体があるのではないから、使いみちによって食卓にもなりまじ、踏み台にもなるでしょう。そしてこわしてストープにくれば、薪にもなるわけです。このように机には実体がないから、本をひろげて勉強しているものは、すべて「机である」と言うことができま

す。それ故、「これは机でない、それだから机である」というパラドックスな立言が可能なのです。

つまりものは「はたらき」によって存在がきまるのです。故に学生は大学では学生ですが、家に帰って家庭教師をすれば、生徒から先生と呼ばれます。人は善いことをなせば「善人」ですが、悪いことをなせば「悪人」です。善人とか悪人とかの実体があるのではないのです。故に言葉でものを表現しても、そのものの、その時の状態を表現できるだけで、そのものの本質を示すことはむづかしいのです。

故に私たちは、言葉によって自分の思うことを表現して、そしてそれが正しく相手に伝わっていると思っていますが、それはきわめて疑わしいのです。しかし私どもは、言葉によらなければ、佛陀の教えでも相手に伝えることはできません。故に中論にも、「若し俗諦に依らなければ、第一義を得ることはできない。第一義を得なければ、涅槃を証得することはできない」と言いまして、世俗の重要なことを説いています。そしてまた「第一義は、みな世俗に因る。言説は是れ世俗なり。是の故に、若し世俗に依らざれば、第一義は説くべからず」とも言っています。

このように言葉は不完全なものです。しかし言葉によらなければ、私共は佛陀の教えを学ぶこともできません。故に言葉に依りながらも、言葉に捉われずに、そこにふくまれる第一義を正しく知るように最深の注意が必要です。法句経には、この点を蜜蜂が、花と色と香りとを害そとなわなないで、蜜だけを取っていくのに喩えています。

(東京大学名誉教授)